

**【科目名】地域理学療法各論****【担当教員】** 守安 久尚・田中 健司・米田 浩久**【研究室】** 診療・研究棟3階305研究室（米田）**【種別】** 必修・後期2単位（講義）**【講義の目的】**

地域でのリハビリテーションを実践している理学療法士の先生方に、臨床での実践について講義していただく。田中先生には、保健センターでの理学療法士の役割と活動内容を講義して頂く。保健センターでは、保健師、事務職員との関わりが大切であり、理学療法士としての他職種とのかかわり方についても学習する。

守安先生には、病院からの介護保険を用いた訪問リハビリテーションの役割と活動内容を講義して頂く。介護保険のシステムと、訪問リハビリテーション実施に必要なケアプランを作成する介護支援専門員と連携することの重要性を学習する。

米田の講義では、地域理学療法についての概論と関係法規ならびに住宅改修や環境調整についての講義を展開する。

**【到達目標】**

聴講する各種地域理学療法に対する理解を深めることを目標とする。

**【授業計画】**

1. 地域リハビリテーションとは
2. 在宅リハビリテーションサービスについて
3. 介護保険とリハビリテーションⅠ
4. 介護保険とリハビリテーションⅡ
5. 訪問リハビリテーション
6. 福祉用具の選定
7. 住宅改修について
8. 住宅改修 実習
9. 在宅リハビリテーションのマネジメント
10. 在宅リハビリテーションのまとめ
11. 地域理学療法における保健センターの役割
12. 地域包括支援センターと地域リハについて
13. 健康増進事業について
14. 保健センター業務のまとめ
15. 後期試験

**【成績の評価】**

試験 50%、平常点 50%

**【自己学習】**

地域理学療法学総論の講義内容を再確認すること。

**【履修上の注意】**

本科目は必修科目であるため、毎回の授業の平常点を重視する。また、大学での授業進行をペースメーカーとして、自発的かつ積極的に予習と復習を行い毎回の授業に臨むことが学習の理解を深めるために必要である。その他の受講上の注意事項については、初回の講義時間の中で伝達する。

**【テキスト】**

毎回の講義でプリントを配布する。

**【参考文献】**

「地域理学療法学ノート」 （アイペック）

理学療法科学学会 監修

**【科目名】理学療法臨床実習Ⅱ****【担当教員】** 鈴木 俊明・谷埜 予士次・吉田 隆紀・  
米田 浩久・文野 住文**【研究室】** 診療・研究棟 3 階 307 研究室(鈴木)・  
308 研究室(谷埜)・305 研究室(吉田・米田)・  
3 号館 3 階 PT 教員室(文野)**【種別】** 必修・前期 6 単位(実習)**【講義の目的】**

理学療法臨床実習Ⅱは、学外の医療施設において 8 週間の実習期間で実施する。理学療法評価から理学療法プログラムの作成、そして、模倣レベルでの理学療法が実施できることを目標にする。運動器疾患、神経疾患についてそれぞれ 2 症例ずつの理学療法を実施させ、この効果を確認させることを目標にする。具体的には、症例の理学療法評価と理学療法プログラムを作成、数週間の理学療法実施の後に再評価をおこない理学療法効果を確認する。医療施設でおこなう最後の理学療法臨床実習であるために医学的リハビリテーションの全体像を把握することも目標とする。本実習で得られた知識・技術を学内での症例発表として報告させる。

**【到達目標】**

理学療法評価と理学療法プログラム作成および理学療法の実施を運動器疾患、神経疾患の症例を通してできるようになる。

**【授業計画】**

1. 第 1 週 情報収集・問診、動作観察・分析
2. 第 2 週 動作観察・分析、検査・測定
3. 第 3 週 検査・測定、問題点の抽出
4. 第 4 週 理学療法プログラムの作成
5. 第 5～8 週 理学療法
6. 第 7～8 週 再評価
7. 第 8 週 まとめ
8. また、第 4 週間で情報収集・問診より再評価まで終了させる実習形態もある。

**【成績の評価】**

実習態度、理学療法臨床実習Ⅱの目標到達度より、理学療法臨床実習Ⅱの指導者と本学教員が協議して決定する。

**【自己学習】**

今までの学内教育の内容を復習しておくことが重要になる。

**【履修上の注意】**

本学で学んだ理学療法技術を臨床実習施設で患者様に対して体験させていただける貴重な機会であるため、積極的に実習に取り組むことが大切である。なお、理学療法臨床実習Ⅱの詳細については、「臨床実習指導要綱」に従うこと。

**【テキスト】**

「臨床理学療法評価法」 (アイベック) 鈴木俊明監修

「運動器疾患の評価と理学療法」 (アイベック)

鈴木俊明監修

「神経疾患の評価と理学療法」 (アイベック)

鈴木俊明・他監修

「脳血管障害片麻痺に対する理学療法評価」 (神陵文庫)

鈴木俊明監修

**【参考文献】**

適宜紹介する。

**【科目名】理学療法臨床実習Ⅲ****【担当教員】**鈴木 俊明・谷埜 予士次・吉田 隆紀・  
米田 浩久・文野 住文**【研究室】**診療・研究棟 3 階 307 研究室(鈴木)・  
308 研究室(谷埜)・305 研究室(吉田・米田)・  
3 号館 3 階 PT 教員室(文野)**【種別】**必修・前期 6 単位(実習)**【講義の目的】**

臨床評価実習、理学療法臨床実習Ⅰ・Ⅱは医療施設での臨床実習であったが、理学療法臨床実習Ⅲでは医療施設に加えて理学療法士の活躍が期待できる施設での臨床実習をおこなう。実習期間は理学療法臨床実習Ⅰ・Ⅱと同様に 8 週間とし、具体的な臨床実習施設としては、診療所、小児施設、介護老人保健施設、特別養護老人ホーム、保健センター、在宅支援事業所である。実習終了後には、学生に本実習で得られた知識・技術を症例発表会として報告させ、様々な施設の理学療法の特徴を学生に理解させる。

**【到達目標】**

これまでの実習で得られた知識・技術をもとにして、医療施設以外で理学療法士がどのように働いているかを知り、様々な施設での理学療法の特徴を習得することを目標とする。

**【授業計画】**

理学療法臨床実習Ⅲは、様々な臨床実習施設があるために詳細な臨床実習計画は提示しない。  
8 週間の臨床実習で理学療法評価、理学療法ができるだけでなく、卒業後に理学療法士として勤務できるか否かを判断いただけるような臨床実習計画を各施設の臨床実習指導者と教員で作成する。

**【成績の評価】**

実習態度、理学療法臨床実習Ⅲの目標到達度より、理学療法臨床実習Ⅲの実習施設の指導者と本学教員が協議して決定する。

**【自己学習】**

今までの学内教育の内容を復習しておくことが重要になる。

**【履修上の注意】**

本学で学んだ理学療法技術を臨床実習施設で患者様に対して体験させていただける貴重な機会であるため、積極的に実習に取り組むことが大切である。なお、理学療法臨床実習Ⅲの詳細については、「臨床実習指導要綱」に従うこと。

**【テキスト】**

「臨床理学療法評価法」 (アイペック) 鈴木俊明監修

「運動器疾患の評価と理学療法」 (アイペック)

鈴木俊明監修

「神経疾患の評価と理学療法」 (アイペック)

鈴木俊明・他監修

「脳血管障害片麻痺に対する理学療法評価」 (神陵文庫)

鈴木俊明監修

**【参考文献】**

適宜紹介する。

**【科目名】東洋医学概論****【担当教員】** 谷 万喜子**【研究室】** 診療・研究棟 4 階 416 研究室**【種別】** 必修・後期 1 単位(講義)**【講義の目的】**

東洋医学の基礎的知識について講義する。また、「東洋医学と理学療法特論」で講義する経穴刺激理学療法の知識として必要な、経穴に関する講義・実習をおこなう。経穴は身体部位の状況を把握する反応点であり、各内臓器官に連結する経絡に沿って並び、その数は 361 種類ある。この講義を通して、理学療法臨床に活かせる東洋医学的知識と経穴の触れ方の習得を目指す。

**【到達目標】**

東洋医学における病態の考え方を、理学療法臨床で応用できるように理解することおよび、経穴刺激理学療法で用いる代表的な経穴について正確に取穴できることを目標とする。

**【授業計画】**

1. 東洋医学の基礎 1
2. 東洋医学の基礎 2
3. 東洋医学の基礎 3
4. 上肢の経穴 1
5. 上肢の経穴 2
6. 上肢の経穴 3
7. 下肢の経穴 1
8. 下肢の経穴 2
9. 下肢の経穴 3
10. 体幹の経穴 1
11. 体幹の経穴 2
12. 体幹の経穴 3
13. 復習 1
14. 復習 2
15. まとめ

**【成績の評価】**

定期試験、小テスト、授業態度を総合的に評価する。

**【自己学習】**

予習は、特に必要ありません。経穴の位置や触れ方について、授業中にしっかりと学習してください。

**【履修上の注意】**

経穴刺激理学療法をおこなう上で、必要不可欠な経穴の知識を学習します。効果的な治療を実施するために、確実に身につけていきましょう。

**【テキスト】**

授業中に配布します。

**【参考文献】**

「新版 経絡経穴概論」 (医道の日本社)

著者：教科書執筆小委員会

「臨床経穴ポケットガイド 361 穴」 (医歯薬出版社)

篠原昭二 著

**【科目名】東洋医学と理学療法特論****【担当教員】**鈴木 俊明・谷 万喜子**【研究室】**診療・研究棟 3 階 307 研究室(鈴木)・  
4 階 416 研究室(谷)**【種別】**必修・後期 1 単位(講義)**【講義の目的】**

東洋医学、特に鍼灸医学と理学療法を融合して本学で開発した、経穴刺激理学療法の理論と具体的な方法について講義・実習をおこなう。また、東洋医学と理学療法を融合した研究報告をまとめるとともに将来の展望についても講義する。

**【到達目標】**

経穴刺激理学療法の具体的な治療技術を把握する。

**【授業計画】**

1. 経穴刺激理学療法の意義と基本概念
2. 経穴刺激理学療法の意義と基本概念
3. 経穴刺激理学療法の意義と基本概念
4. 経穴刺激理学療法に関する研究成果紹介
5. 経穴刺激理学療法に関する研究成果紹介
6. 神経疾患に用いた経穴刺激理学療法の臨床応用
7. 神経疾患に用いた経穴刺激理学療法の臨床応用
8. 神経疾患に用いた経穴刺激理学療法の臨床応用
9. 運動器疾患に対する経穴刺激理学療法の臨床応用
10. 運動器疾患に対する経穴刺激理学療法の臨床応用
11. 運動器疾患に対する経穴刺激理学療法の臨床応用
12. 運動器疾患に対する経穴刺激理学療法の臨床応用
13. 動作分析と経穴刺激理学療法の関連性
14. 動作分析と経穴刺激理学療法の関連性
15. まとめ

**【成績の評価】**

レポート課題 90%、平常点 10%で評価する。

**【自己学習】**

1 年生で東洋医学と西洋医学を履修した学生には、その内容を再度学習してほしい。未履修の学生は、1 回の授業をきちんと把握できるように努力してほしい。

**【履修上の注意】**

本特論は、本学で開発した経穴刺激理学療法を学ぶ重要な科目である。本学でしか学ぶことのできない理学療法特殊テクニックを十分に学んでほしい。

**【テキスト】**

資料を配布する。

**【参考文献】**

「The Acupuncture for Dystonia—ジストニアと鍼治療—」  
(アイペック) 鈴木俊明・他 監修

**【科目名】神経難病理学療法特論****【担当教員】** 鈴木 俊明・後藤 淳・手塚 康貴**【研究室】** 診療・研究棟 3 階 307 研究室(鈴木)**【種別】** 必修・後期 1 単位(講義)**【講義の目的】**

神経筋疾患理学療法学 I で教授した神経難病であるパーキンソン病、脊髄小脳変性症、筋萎縮性側索硬化症のほか、スモン病、ジストニアなどに対する理学療法および在宅での理学療法について、特殊テクニックを中心に講義する。また、神経疾患患者の理学療法において、本学で開発した動作誘導法である臨床動作促進法の理論と実際についても教授する。

神経疾患のなかで脳血管障害の麻痺側上肢機能の回復は非常に困難である。脳血管障害の麻痺側上肢機能に対するアプローチであるミラーセラピーについて講義する。

本特論を通して、神経難病患者への理学療法の可能性を学ぶ。

**【到達目標】**

神経難病患者の運動療法で用いられる特殊テクニックを把握する。

**【授業計画】**

1. 神経難病患者への理学療法特殊テクニック(臨床動作促進法)
2. 神経難病患者への理学療法特殊テクニック(臨床動作促進法)
3. 神経難病患者への理学療法特殊テクニック(臨床動作促進法)
4. 神経難病患者への理学療法特殊テクニック(臨床動作促進法)
5. 神経難病患者への理学療法特殊テクニック(臨床動作促進法)
6. 神経難病患者への理学療法特殊テクニック(臨床動作促進法)
7. 神経難病患者への理学療法特殊テクニック(臨床動作促進法)
8. 神経難病患者への理学療法特殊テクニック(臨床動作促進法)  
以上 鈴木担当
9. 神経難病患者への在宅での理学療法
10. 神経難病患者への在宅での理学療法
11. 神経難病患者への在宅での理学療法
12. 神経難病患者への在宅での理学療法  
以上 後藤担当
13. 脳血管障害片麻痺患者へのミラーセラピー
14. 脳血管障害片麻痺患者へのミラーセラピー  
以上 手塚担当
15. まとめ

**【成績の評価】**

レポート課題 90%、平常点 10%で評価する。

**【自己学習】**

神経疾患理学療法学 I・II の知識を再学習しておくこと。

**【履修上の注意】**

本特論は、本学の特徴である神経難病患者への適切な理学療法を学ぶ重要な科目である。理学療法特殊テクニックを十分に学んでほしい。

**【テキスト】**

「神経疾患の評価と理学療法」 (アイペック)

鈴木俊明・他監修

**【参考文献】**

**【科目名】精神疾患理学療法特論****【担当教員】** 米田 浩久**【研究室】** 診療・研究棟 3階 305 研究室**【種別】** 必修・後期 1 単位（講義）**【講義の目的】**

本邦における精神疾患に対するリハビリテーションとして、従来、必要性の観点からも法制度的見地からも作業療法の需要は高かったが、理学療法に対しては十分な門戸が開かれていたとはいえない。本講義では、統合失調症などの従来型の器質性精神疾患のみならず、近年注目されているパニック障害や抑うつ障害等に対する理学療法のあり方について最新の知見を踏まえて講義する。特に、今後ますます増加すると考えられる認知症に対して、その病態の理解とともに理学療法や同疾患への運動療法の効果についても講義する。

**【到達目標】**

精神疾患固有の問題点の把握と理学療法の取り組みについて考察できることを目標とする。

**【授業計画】**

1. 精神疾患リハビリテーション総論
2. 精神疾患の症状について(1)
3. 精神疾患の症状について(2)
4. 精神疾患の症状について(3)
5. 各論 器質性精神障害
6. 各論 統合失調症
7. 各論 気分障害
8. 各論 ストレス性障害・不安障害
9. 各論 精神作用物質による障害
10. 各論 認知症
11. 精神薬の身体機能への影響
12. 拘束・隔離の身体機能への影響
13. ストレスから精神疾患と運動を考える
14. 行動心理学から精神疾患と運動を考える
15. 総括

**【成績の評価】**

試験 80%、平常点 20%

**【自己学習】**

心身医学の講義内容を再確認すること。毎回の講義について必ず復習すること。

**【履修上の注意】**

国家試験領域の科目であるため、予習復習を必ず行い、体系的に理解できるように努めること。

**【テキスト】**

毎回の講義でプリントを配布する。

**【参考文献】**

特になし。

【科目名】スポーツ理学療法学特論

【担当教員】谷埜 予士次・吉田 隆紀・大工谷 新一・  
三浦 雄一郎

【研究室】診療・研究棟3階308研究室（谷埜）・  
305研究室（吉田）

【種別】必修・後期1単位（講義）

【講義の目的】

講義の前半ではスポーツの基本動作について実技も加えて紹介する。そして、スポーツ選手の個体的・環境的およびトレーニング要因を考慮して理学療法を展開する。

【到達目標】

代表的なスポーツ動作を取り上げて、受傷機転の理解、スポーツ動作の分析と問題点の把握や再発予防に関するポイントを考えることを目標とする

【授業計画】

1. オリエンテーション
2. スポーツ動作理解のための運動学①
3. スポーツ動作理解のための運動学②
4. 急性および慢性外傷の発生要因①
5. 急性および慢性外傷の発生要因②
6. スポーツ動作の分析と力学的負荷①
7. スポーツ動作の分析と力学的負荷②
8. 上肢のスポーツ外傷と理学療法①
9. 上肢のスポーツ外傷と理学療法②
10. 下肢のスポーツ外傷と理学療法①
11. 下肢のスポーツ外傷と理学療法①
12. 下肢のスポーツ外傷と理学療法②
13. 頸部・体幹のスポーツ外傷と理学療法①
14. 頸部・体幹のスポーツ外傷と理学療法②
15. まとめ

【成績の評価】

定期試験 90%、平常点 10%で総合的に評価する。

【自己学習】

運動学、骨関節疾患理学療法学を復習しておくこと。

【履修上の注意】

実技も行うため、動きやすい服装を用意すること。

【テキスト】

適宜、資料を配布する。

【参考文献】

**【科目名】理学療法研究法****【担当教員】**鈴木 俊明・谷埜 予士次・吉田 隆紀・  
米田 浩久・鬼形 周恵子・文野 住文**【研究室】**診療・研究棟 3 階 307 研究室(鈴木)・  
308 研究室(谷埜)・305 研究室(吉田・米田)・  
3 号館 3 階 PT 教員室(鬼形・文野)**【種別】**必修・後期 4 単位(演習)**【講義の目的】**

理学療法研究は理学療法の発展のために必須である。理学療法は技術先行で発展してきた学問と考えられ、日常行われている理学療法技術に対する効果についても客観的に示されているものはまだまだ十分多いものとは考えられない。あらためて理学療法の効果を客観的に実証していくことは大変重要な作業となる。本科目では理学療法領域での研究方法を講義する。教員の指導に基づき、研究計画の立案と実験をおこない、その結果を考察する。研究成果は卒業後に理学療法専門学会で発表させ、雑誌への論文投稿をおこなう予定である。

**【到達目標】**

理学療法の研究の基礎を把握する。

**【授業計画】**

各授業については担当教員による。

**【成績の評価】**

理学療法研究レポート、理学療法研究に取り組む態度を総合評価して判定する。

**【自己学習】**

研究の内容に応じては、今までに学習したすべての内容が基礎となる。

**【履修上の注意】**

教員の専門領域の研究について、積極的に論文を読み、実験に取り組むこと。

**【テキスト】**

適宜配布する。

**【参考文献】**

適宜紹介する。